

# 療養所入所者との懇談会の記録

---



## □ 療養所入所者との懇談会の概要

---

検証会議では、その活動の一環として、療養所の入所者を招いて、県民との懇談会を開催しました。

これは、入所者の生の声による体験談を聞いていただくとともに、検証会議の活動のプロセスを県民に知らせることにより、ハンセン病問題に対する理解を深めていただく趣旨で開催したものです。

参加者からは活発な意見も出され、有意義な会となりました。ご出席いただいた2名の入所者の方に、この場を借りて改めて御礼申し上げます次第です。

検証会議の活動の1つの成果として、当日の記録を報告書に掲載するとともに、今後こうした活動を通じて、より多くの県民がハンセン病問題を考え、この問題を取り巻く現状を変える活動につながっていくことを期待するものです。

□ 日 時 平成17年11月13日、午後2時から4時まで

□ 場 所 長野県上田市「上田合同庁舎講堂」

□ コーディネーター、発表者

- ・ コーディネーター 野田正彰さん（長野県ハンセン病問題検証会議座長）
- ・ 発 表 者 山崎さん（仮名／多磨全生園）、丸山さん（栗生楽泉園）

（野 田）

本日は、療養所に入所されている丸山さん、山崎さんにお越しいただいて、県の人たちに、どんな思いで生活されてきたのか分かっていただこうと思っております。お二人とも大変人柄は温かくて、瀟洒なお話をされますが、子どもの時から、大変なご苦労と苦難の中で過ごされてきた上での明るさということを私は感じます。これは、私たちがこのハンセン病の問題を考える上で忘れてはならないことで、今私たちがたまたま幸せであるからといって、片方に悲しい思いをしてくたり、苦難の思いをしてくた人がいるということをお二人の話の明るさの中に、山崎さん、丸山さんの人生を聞き取っていただきたいと思っております。

それでは、最初に東京多磨全生園にお住まいの山崎さんからお話をうかがっていきたいと思っております。子供時代の思い出、病気が発病した時どんな風にして病気を知ったか、それが入所とどうつながったか、それから療養所での生活、とりわけ戦後のことなど。山崎さんはおいくつでしたっけ。

【山崎さん】

今ですか。81歳です。

(野 田)

81ですか。大変若々しいですけど。戦後ですね、薬ができ、諸外国が開放政策が当たり前になっているにも関わらず収容政策をとりつづけた、そういう中での山崎さんの思い。厚生省に行って、いろいろな運動をされておられましたし、そういうときの思い。そして、状況が近年になって変わって行って、そして現代というそのような流れをお話しいただければと思っています。それでは、山崎さんのふるさと、それから子ども時代のお話を聞かせていただきたいと思います。

【山崎さん】

私の生まれたのは上伊那郡の辰野町、発病したのは昭和12年13歳のときです。学校では、スポーツ大好きで、テニスもやる野球もやるバスケットもやる、そういう中で、高等小学校卒業は、昔の高等小学校で、尋常高等小学校で高等2年の中途までは行ったはずなのですが、療養所を出て、家に帰って高等学校1年中途退学ということだったのですけれども、バスケットやっている最中に、指導している先生のちょっとした悪口を影で言っているつもりだったのに、聞こえてしまって、どえらいお目玉をくらってしまって、あの固いバスケットボールをぶつけられて、左の耳方のここに当たって耳が聞こえなくなってしばらく困ったなという状態があったのですが、すぐ直って2ヶ月程したら、ハンセン特有の感覚がなくなって麻痺してきて、おかしいというので、親父にここがおかしいよと言ったら、それはちょっと普通の病気じゃないかと、すぐ日赤病院に行った方がいいだろうと親が連れてってくれました。日赤に行って、外科を回ったりいろいろなところを回っているうちに、あなたは皮膚科の方に行ったほうがいいんじゃないですかというふうに言われて、皮膚科へ行って、すぐその場でここでは病名ははっきり言えないけれども、東京帝国大学のお医者さんに診てもらいなさいというふうに言われて、その足で東京へ行って、帝大へ行って、診てもらいました。その診てもらった帰りが昭和12年の7月7日、盧溝橋事件が始まったというふうにして号外が出たときであったので今も覚えております。それで親父の弟が東京にいたので、弟のところへおまえを預けていくから、先生が帝大なら通えるというから、ちょっと東大の皮膚科の外来へ通いなさいというふうに言われて、皮膚科の外来へ翌年の13年の3月まで通いました。3月、ちょうど学校が終わるので、終わったときに行っただけなのですが、卒業証書はなくて、親はおそらく中途退学したまま何にも病気が分かると困って言わなかったんじゃないかなという感じがします。うちに帰って、色々したんですが、治療するのが大事ということで、もと草津の温泉療養をしたという人と知り合って、うちで治療するんだったら大風子油というものを私は知っているから、買ってあげるから、うちで治療したらどうですか。東大にはそのまま3月まで通ったんですけど、うちへ帰って、親に大風子油をやってもらって、昭和16年の暮れまでいたんですね、うちに。17年になって、薬がきれたらどうしようかなと思って、東京にいるお友達の人に連絡したら送ってあげますと言うので送ってもらったんですけど、大東亜戦争が始まっ

たときですから、太平洋戦争の始まりですから、もう、ちょっと落ち着いていられずに、何とかこれしなきゃいかんなど思っていたんですけれども、そのうちに17年の5月だったと思いますけれども、元気なのは徴用に引っ張られるぞというふうに言われていたところ、岡谷の職業紹介所から出頭しろというふうな詔書がきたんですね。行って、それで引っ張られるところだったんですが、どっかで、身体検査のときにパンツひとつでお医者さんのところに行ったんですけれど、分からずにいろいろ聞かれました。あなた病気したことございますかって言うから、病気したことあります、何をやったこれをやったあれをやったって言ううちに、どうも何回も聞いているから、このままいけば治療しっこなしに工場で働いて無理したんじゃ、病気が悪くなるんじゃないかなと思ったから、そこまで、今ハンセンっていうけど昔は癩病、癩病ですって言ったんだ。「えっ」てお医者さんが言ったまんま、自分の机からいすを持ってあの壁ぐらいのところまで離れてですね、手はどうした、足はどうしたって言うんで出したら、分かった、じゃあ外に出ないでまず部屋の外に出されたんですね。そのときの徴用でいっぱいだったけど百人ぐらいいたと思います。私は今も番号覚えてるんですけど50番でした。でそういうことで分かってうちへ帰ってきたんですけど、そのまんまうちにいたんじゃ大変な、また引っ張られる、町のうわさになると困るんだというふうになったんで、それで7月に自ら多摩全生園へ入れてもらいました。そのときには受付で、受け付けた全生園の事務官が、あんたここへ入ったらもう出れないぞ、神や仏は信用して信頼して拝めよ、拜んでここで療養して暮らすよりしょうがないからそのつもりでいなよ、っていうふうに言われて、その後先生、女の先生でしたけれど、先生が来て、あんたどこもなんともないからうちに入らいいんじゃないのって言われたんですけれども、今のこういう状態で徴用に引っ張られたり色んな事をされると困るから、先生お願いします、入れてください、っていうふうにしてそこへ入ったわけです。その前に親は、あそこへ行ったんじゃ死んで骨になって出てこないよと帰れないぞというふうに言われたんですけれど、まあ行ってみないと分からないから、行って1回見て、いつでも逃げ出せるような状態だったら入って、それも大変だと思ったら逃げて帰りなさい、1回全生園を見に行ったら、それで入ったわけです。そのとき入ったのが、大風子油が一生懸命やればよくなるだろうというふうに思って、随分治療したんですけれど、なんせ戦争の最中で20年の頃になったら食糧難、ああいうところなんですけれど、なくなっちゃって腹が減って腹が減ってとてもあそこへいられなくて、急遽飛び出して、ご飯食べれるようなところ見つけて仕事に出てきました。そのときは何ともなかったですから行って、土木の親方のところに頼んで入れてもらって、そこへ仕事についたのが終戦の年の8月ですね、8月14日の日に作業場に行って、お願いしますって言ったら、ああいいよと、あんちゃん体格いいから一生懸命やればいいからうんとやってくれ、おまんまいくらでも食わしてやるからやってくれというふうに言われて、そこで一生懸命働いたんですが、15日のお昼に玉音放送という天皇の放送がありまして、終戦を知りまして、そこで飯場の親方に切符を買ってもらって、信州辰野町の家へ帰ったわけです。そのときはもう全生園も離れていた

わけですから、さてこれからどうしようかと考えていたんですけど、一応そこで22年までうちにいました。

(野 田)

じゃあ一区切りしましょうか。いくつか初めての方分からないことがあると思いますけれど、みんな戦前から収容所しか医療がなかったわけではないということを山崎さんのお話や色々ですね、外来の治療も戦後も細々と続いておりました。ただ東大は早くなしですね、東大の場合は、

【山崎さん】

東大の場合は7月から翌年の3月まで通っていて…。

(野 田)

いやいや、山崎さんは行かれたけど、その後戦後はあまり行ってないですね。

【山崎さん】

行ってないです。

(野 田)

全然行ってないですね。

【山崎さん】

うちへ帰った後、

(野 田)

私はあんまり、東大はどうか知りませんが、外来治療を続けたのは、京大が一番熱心にきちんとやっておりました。小笠原先生とか私の習った先生もおられるんですけど。それから阪大、名古屋大学、他にもやっているところいくつかあるんですけど、こういった大学での外来医療は、収容所体制を作ったグループから非常に攻撃されて、学会で攻撃されたりしていたわけです。そのひとつの一端で外来があります。それから大風子油っていうのは、言ったら油ですね、今でいうてんぼうだいで、油でとじてあるんですね。あれ大変痛いですね。

【山崎さん】

痛いです。

(野 田)

患部に注射して、私は打ったわけではないから分からないですけど、ちょっと説明していただけませんか。

【山崎さん】

注射の針が普通の注射の針と違ってですね、私たちは馬へ注射する針だってとよく言ったんですけど、すごく太いんですよ。油が入らないから。

(野 田)

油だから入らない。

【山崎さん】

あれはものすごく痛いんですね。ほとんどやるのはお尻にずっとやってきたんですけどね。お尻も同じとこばかりやるもんだから、こっちをやったり大腿部にやったりするんですけど、同じところにばっかやってて、うまくもんで散らしてしまえばいいけど、散らさないでそこで固まっちゃって化膿したら、もう治療した甲斐がなくなっちゃうんですよ。全部膿になって出ちゃいますからね。そういうことを2回ほど繰り返しました。

(野 田)

みんな治りたい一心で必死になって打ったんですね。痛みをこらえてですね。それからうちの事情はあったと思うんですが、もし構わなかったら教えてください。こんなに珍しいですね、早く発見されたっていうのはですね。ちょっと打ったとかいうことで、すぐおかしいよなお父さんが言われた。相当お父さんも知識が、体についての、ハンセン病が分かっていたかどうか分からないけど、息子に関心がいろいろあったんでしょうね。気遣ってくれる。

【山崎さん】

遠い親戚にもいたっていう…。

(野 田)

それから東京まで行って外来まで受けて、おうちは相当豊かだったんですか。

【山崎さん】

私のうちですか？いや、水飲み百姓のその日暮らしです。

(野 田)

じゃあ大変なことだったわけですね。それからあの、軍事工場の話が出てきましたけれ

ども、あの、そういう構えを見せたことにどう思いましたか。医師だとか周りかですね、まっバカなことをしているわけですけど、後ろに飛んでいくとかですねそういう話を聞くと、まっ医療に係わっている人間が一番偏見があったんだなということを物語るエピソードですね。どんな風に思われましたか？

**【山崎さん】**

あの、まあ栗生もそうだと思いますけれど、私の入っている寮舎というのは最初12畳半にね、詰めるだけ詰めて、私の入った時には。

(野 田)

全生園のことですね？

**【山崎さん】**

ええ、全生園ですね。そういう中で先生にそんなことを言ってもね、「いやぁ、それは」と言うだけで取り合ってもらえない、でもあの治療のことについてはね、あの結構厳しかったんですけれども、大風子でも治りたい一心だから、大勢並んでいるから1回やってまた後ろの方に並んで、またもう1回行ってやるっていうようなね、看護婦さん見ている、そういうあんまり文句言わずにやってくれたりしたからね、あの同じ所に何回もやっても、それこそお尻の肉がパンパカパンになっちゃうようなこともあったんですよ。

(野 田)

大変、あの想像されると思うんですけど、あの普通の液体でなくて油で溶いてあるんですよ、大変痛いんですね。それもまっお話しを初めて聞きましたけど、1回打ってまた並んで、だからそれくらい少しでも良くなりたい一心ですよ。

**【山崎さん】**

そうですね。

(野 田)

ええ、そうされていたんですね。いや、先程の質問はどうですか？その後ろまで腰掛けで引きずるようなね、そういう医者を見てどんな風に思われました。

**【山崎さん】**

あの、手が悪くなる、足が悪くなるってのは知っていたような感じですね。

でも、傍にいてやるんじゃないくて、椅子持って逃げてってそうやって、それであの、外へ出て待ってなさいと言われて外出て待ってたら、あの～入口にいた人を呼んで耳打ちし

たら消毒器を出して消毒したんですね。私の座っていた椅子とテーブル、入り口、で私にはあの～支度をして所長が呼んでいるから行きなさいと言うので、支度をして所長のところに行ったんですけどね。

(野 田)

今と違ってですね、あの感染疾患について医学の中で感染に対して非常に病的なくらい恐れるというところもありましたし、一方では国家の政策としての隔離というのがですね、非常に強かったということ両方あるんですね。

だけど、やっぱりお話し聞いていると、それは教育が悪いですね医学教育の、ゆがみでその人に何の知識もまともな知識もないということですよ。え～後ろに下がってといかなる感染症でも今から考えるとバカな話ですけど偏見の固まりの行動をとっているわけです。

まあこの間の中国におけるSARSの問題でもやっぱり、一つの感染症に非常に極端な反応をこの社会はしますよね。台湾の医師がちょっと歩いたということでもうわぁわぁ怒ってですね、ああいうのを旅行されたのがけしからないというような論調が非常に強くありましたのを覚えてられるかと思いますが、極端なそういう反応をしやすい体質っていうのが私達社会にありますよね。

じゃあ、戦後のおうちでちょっと過ごして、それからちょっと症状が出始めて、もう1回全生園に行こうという話を続けてください。

【山崎さん】

22年の5月にですね、どうにも体のいうことが利かなくなりあんまり外へ出るとわかるほど顔一面に医者に言わせると結節って言うんですけど、細かいのがブツブツ出るんですね。ものすごく増えてきたので、これは早く行かないとダメだというふうに感じてですね、家の玄関を出て道路を歩くときにはタオルでほっかむりをしてですねバス停のところまで歩いて行って、まあ人に分からないようにしたんですけども、そりゃいくらほっかむりしていても正面から見れば分かるわけですね。それでバスに乗って駅へ行って汽車に乗ったんですけども、汽車の中もほっかむりはしてもらえないから、帽子を持っていたから帽子をかぶって隅っこのほうで頭を下げて八王子まで行ったら列車が列車事故があって行けないっていうんで、これはまぁ困ったなぁと思ったけどそのうちまた動き出したんで、え～なんとか汽車、電車を乗り継いで全生園に行ったんですね。それで収容病棟というのがあって皆入ってくるとそこへ入れるんですけど、知ってる先生がいて「あんたは、こっから逃げ出した人間だな」というふうに言われてですね、どうなります、監房へ入れて処分しますか？と言ったら、イヤ今民主主義の世の中になったからそういうことはせんけれども、何で行ったんだと、何で行ったんだって、ここで飯食えないからですよってことで、まあそういう話をして収容病棟入れられたら、何人かいる中でみたら東大に通っていた仲間が随分いまして、来ていまして、「なんだお前も来たか」という風なことでそこへ入ったわけです。



(野 田)

療養所の秩序ということですね、見せしめに隔離棟に入れて、何日ですか？多くの場合。

【山崎さん】

ちょっと重いのは31日。

(野 田)

そうやって見せしめにやっていたんですね。戦後ですから無かったということらしいです。

【山崎さん】

私の親代わりみたいにして年取った方が面倒見てくれていたわけです。その人がですね、園の職員に働きかけて、病気が治ってきてるんだから入れてはダメだと言ってみたいですね。それでじゃあ収容病棟に居ろっという風なことでそこにおりました。

(野 田)

まっついでに言いますと、山崎さんの場合もそうですけど、全国でですね例えば熊本だとかそういうので、いろいろ集団脱走した人達とかですね、一緒に小売りをした人というのは、その刑務所、刑務所ではない留置所みたいなのが別個に造ってありましてですね、そこに入れられるんです。入れられて皆さん若い人はちょっと鍵がかかった部屋に入るだけかと思われるかもしれませんが、想像力がない、けどそんなもんじゃないですね、離れたところで暖房もなかったりするわけです。南だったらいいんですけど例えば極端にはですね、施設に逆らう奴には丸山さんがおられた楽泉園には施設からずっと離れた山の中に隔離棟がありましてですね。その中に放りこんだんです。雪が降る寒い中でかなりの人が死んでいったんですね。そういうこと背景があります。どうぞ。

【山崎さん】

それですね、あの～病気はどんどん悪くなる、あの～今はこのような顔ですけれども、顔にブツブツできてきて、目の下までブツブツできてきて、目は開かない口の周りにもできて、口もご飯を食おうと思って入れても口を開けない、無理矢理やって口の両端から血が出るような中で飯を食べてですね、え～治療をしながらそういうことをしていたんですけど、このままいったら死んだ方が楽になるんじゃないかなっていう風なことをしょっちゅう思ってました。それでたまたまあの～新聞、あそこは新聞って新聞をあまり読ませないように1箇所だけしか置いてなかった。たまたまその新聞を見たらですね、アメリカで発行しているリーダーズ・ダイジェストという本が出てましてね、その本にカービル療養所でプロミンという薬ができて使って、皆良くなって退院している人がいるんだという風に

あの～記事が出てるっちゃうんで、その本を買ってみてですね、医者にこういう薬が出て、治るっちゃうんだけど何とかならないですかって言ったら、「あんたそんなこと言って、そんな薬が信用できるのか信用できるのは大風子油しかないんだよ」というようなことを言われて22年の年は終わりました。

23年になってまた病気が悪くなってきたから、こういういい薬があるからやらないかと医者から薦めがあって、試験でやってみたら、返って悪くなって「先生、このままじゃ苦しくてどうしようもないから、何とかいい薬があったら一服盛ってよ」って言ったら「何を馬鹿なこと言ってるんだ。この薬はいいからやんなさい」という風に言われたんだけど、とても続ける気にならないから断りました。どんどん悪くなる。今は喉が悪くなる人はいないですけど、その頃は結節のように喉がペッグがでなくなり、息ができなくなる。

喉を切開しなければいかんという風になり、カニューレという器械を使う寸前にまできました。

「何とかならないですか」と言ったら、「もうちょっと我慢していれば」と言うので「何とかしてください」って言ったら、その年の7月暑い頃、「テスト用に入ったから、あなたにやってあげる」と、ようやくそこでプロミンが手に入って、その時既に22年、全生園でテストをやっていましたが、ものすごい病気の重い人が軽くなってヒョコヒョコ飛んで歩くような状態になっていたので、「何とかして」と言ったら、先生は「そんな物はやっただめだ。効かない」と一点張りだった。先生によるけれども、そういう状態で泣く泣く我慢していたんですけども、何とかやってもらうようになって、普通の人だったら3グラムないし5グラムやるんだけど、私の場合は、1グラムしかやりませんでした。先生は「テストとして1グラムを1週間やり、2グラムを2週間というのを繰り返して、5グラムまでいったらまた4, 3, 2, 1という繰り返す方法をやって、どういう具合によくくなっていくか経過を見たい」と言うので、「いいですよ、やってください」ということで、ようやく24年の年にやってもらいまして、続けること10余年、今は土日休みですけども、日曜日は休んでずうっと血管注射を繰り返したり症状はよくなってきたんですけども、血液がおかしくなるって言うんで、血沈検査というのを始めて、それを見ながらやるようになって、漸く顔に一杯できたのも、喉にできたのもよくなり、声が出るようになり、目の周囲もよくなって、当時先生が撮っていた写真を見ると、これが私の顔かと思うほどひどい顔だったんですけど、今はおかげでこのような顔になりました。その薬ばかりではなく、プロミンというのは耐性菌ができるということが分かってきて、それだけではだめだということで、今飲み薬で使っているDDSと、その後すぐにできたりファンピシンという薬を併用するような形で、だんだん菌が減って行って、先生方が菌を等級割りにして一番菌の多い人を6, その次が5, 4, 3, 2, 1, 0という風にして、治療やっついて0になったら「あなたはもう治療しなくていいよ」と「もう治ったも同じだ」と言われていたんですけど、私の場合はかなりやっても、3以下にはならなかったですね。ようやく熱心に続けていて、0になったのはリファンピシンのおかげだと今は思っています。

それから後は、治ったらとにかく家へ帰って、私は一人っ子だから、親の面倒を見てやらんといかんなあと思っていたんですけれども、予防法は治るという条項はなくて、退院はできなかつたんですね。ちょっとでも後遺症があったら、園長は許可しないと言われていたので、外に出られるときに県庁に行き、親の面倒見たいから、できたら親夫婦は老人ホームへ入れていただけませんか、とお願いに行つたんです。そうしたら、「今は夫婦で入る老人ホームはないから、少し待たなければならぬけれども、それでもいいですか」と言うので、「それでもいいですけど、あのまま1年半から2年経ったら動けなくなるから、なるべく早くお願いします」ということで、まあ、私が出てこれたら面倒見られたんだらうけど、見られないから頼んで養老院へ入れてもらったんだけど、親の方も私が治ったと言っても周りが偏見と差別の中では、親も参っちゃうんじゃないかと思ったんです。でも、私が行けば何とかなるだろうと思ったんですけれども、ついつい行けずに親は昭和49年と平成4年に2人とも亡くなってしまいました。

(野 田)

ちょっと話は飛んだが、結婚の辺りを話してほしい。

【山崎さん】

少し前に戻るが、病気がよくなって、私はスポーツが好きで、野球なんか一生懸命にやり、テニスなどもやっていたんですけれども、33年の年に友達が…

(野 田)

結婚の前に闘争を始めましたね。その頃のことを話してください。国会の陳情にまで行かれたことを。

【山崎さん】

確か28年は予防法闘争の時でしたよね。その前に記憶は定かではないが、26年にプロミン獲得闘争というのをやりました。みんながよくなるんだったら厚生省にお願いして、お金を出してもらわなくてはどうにもならないということで、患者全体で大会を開いて、プロミン予算獲得運動というのを始めたわけですよ。時の自治会の代表をしている人を選んで、国会へ送りだしたわけです。県庁にいてもだめだろうということで、全生園とつながりのある代議士を訪ねて何とか時の大蔵大臣池田勇人さんに会うように頼み、ようやく会ってこういう状態ですと訴えたところ、これは大変だということで、「予算を6千万円ほど付けてあげましょう」という風に言われたんですけれども、3～4日経ってから5千万になったという代議士からの連絡が来てました。また金額が少なくなつては薬が来ないんじゃないかなと心配したけれども、東大の薬学博士の石館守三先生が、合成に成功したということで、日本で合成プロミンができ安くなつたんで、5千万でも6千万分の価値が

ある薬ができるようになったんで大丈夫だとみんな喜んだわけです。それで一斉に全部プロミンができるようになったわけです。

(野 田)

予防闘争はどうですか。

【山崎さん】

予防法闘争は28年に、園長は確か怒ったそうですね。「何でいつまで予防法なんてことをしているんだ。皆治っているのに出ていかないのはどうしてだ」と。「療養所にいるのは、変な予防法があるからじゃないか」と言うと、「あんた等が予防法を知るわけがないじゃないか。何処でそんなこと知ったんだ」とえらい怒られたようですが、その中には、療養所の中に入れるけれども、治って外に出すという条項は一つもないと言うので、そんな予防法はない、「これはだめだ、直してもらおう」ということで、28年の7月から、予防法闘争が始まって大々的に国会陳情あるいは厚生省陳情が始まったんですね。

それでそのとき私も元気になっていたから、連絡係として厚生省と園をあれして、だんだん座り込みになってきたんで、座り込みをやっている人たちのために、食事を運搬しなければいけないから、運搬のほうをやってくれということで、そのときの藤楓協会に車があったので、その車を出してほしいというお願いをして、じゃあ使っていいだろうということで、藤楓協会の車を使って、にぎり飯を乗用車にいっぱい積んで、毎日3回ずつ国会と厚生省にいる人たちのところへ運んだんですね。

そういうことをして、8月になってから「予防法がもう通りそうだよ」というふうになったときに、「これは大変だ」というんで、みんな動員がかかって一遍に園の人たちに、出られる人は全部国会へ行くということで、今の所沢街道を出て国会へ向かってみんな動きだした。

田無の町の入り口まで行ったら、機動隊が出てきて「ここから先へ行ってはいかん」ということで、あそこで止められたんですが、我々の命にかかわる人権の問題なんだ、命にかかわる問題なんだということで、園長を説得して「じゃあ、代表だけ国会へやってほしい」と。園のバスを1台出して、国会へ行って座り込みをやっている人たちを激励して帰ってきたと、そういうこともありましたね。

それで予防法は何ら変わらない、退院条項はひとつもない、そういう予防法がそのまま通っちゃったんですね。

(野 田)

一方で、皆さんが運動しているときに、あのときの全生園の園長は誰でしたっけ。熊本菊池療養所の宮崎さんと。光田さんはね。

予防法で、収容体制を維持するということを、国会で証言して進めているわけですね。

**【山崎さん】**

3園長の証言というのがあるわけですね。あれはもう、直らないから。

(野 田)

あのときは、皆さんはそれを知らずに運動をしていたわけですか。

**【山崎さん】**

いや、3園長の証言が基で始まったんです。

(野 田)

そうですか。知ってですね。

**【山崎さん】**

知って。それでひどいじゃないかということで、改正してほしいというのが主眼だったわけですね。

(野 田)

園長への抗議はしないですか。

**【山崎さん】**

園長に、抗議しましたよ。

(野 田)

どんな対応でした。

**【山崎さん】**

そのときの対応は、上の人たちだけの対応ですから、我々は下働きでやっていたからどういふあれかわからないけど、それはだめだと。それで厚生省へ行って陳情してほしいと言っても、行かなかったんですね。

(野 田)

菊池なんかの熊本の話では、国会ではそういうことを言っておきながら療養所段階では、別なことを言っているんですね。よくなるとか、もう菌はそんなことないとか、そういう言い方をして、園長自身が二枚舌を使っているという話は出ていますよね。

**【山崎さん】**

その3園長の証言も、代議士の方が厚生委員会で証言した、その議事録を手に入れてくれたからわかったんですね。3園長の証言というのがね。

**(野 田)**

皆さんを世話している責任者が、一方で自分の職域を維持するためかのように、収容体制を続けるということを証言しているわけです。これは単に誰か外の人が陳情するとか、そういう問題ではありませんね。

ハンセン病の収容政策の権威が3人、そういうことを言うわけですから、厚生省以上に権威者です。彼らの話を聞かないというわけに、国はそういう関係ではありませんから、ずっとハンセン医療をやってきた園長たちが、そういうことを言うのを変えていくというのが、大変な難しさがあったと。

それから結核の患者会も、ハンセンの、当時は癩の患者会も、いろいろ攻撃されましたよね。赤だとか、何とか言って、大変な攻撃の中で運動を続けられた。

**【山崎さん】**

何にも知らない、外の状態を知らないから、隣の清瀬の結核療養所の人たちは、しょっちゅう厚生省交渉をやっているわけですから、そういう人たちを知っていたからアドバイスをしてくれて、それで行ったんですけどね。最初、陳情に行っても厚生省は入れなかったんですよ。

顔を見ていると分かるから、門衛がとおせんぼうして入れないんですよ。

**(野 田)**

それからあと、私的なことで結婚の話を、ちょっとロマンスも含めて話してくれませんか。

**【山崎さん】**

あまり苦手で。したくはないんですが。

24年から32年まで、プロミンの結果で病気がよくなって、元気に野球をやったり、テニスをやったり、卓球をやったり、スポーツが好きだから跳ね回っていたんですが、友達の薦めで「いい人がいるから一緒にならないか」ということで、「まあ、今ここへきて一緒になってもしょうがないからいいよ」というふうな話だったんですが、「2人で助け合いながらやったほうがいいから、考えてごらん」ということで、「じゃあ」というふうに話がまとまったんですが、何せ結婚式をやるといってもお金がないんですから。

何もできないから「これは困ったな」と言ったら、親の方から心配しなくてもいいよと言って、面倒を見てくれました。本当に親しい友達と仲間内だけで、お茶菓子を買って、披露宴ということにしました。結婚したのは34年です。

結婚した時、親が面会に来て、「子どもだけはつくるなよ」と、くどくど言われました。それに対して、「今は治るんだから大丈夫ですよ」と言っても、頑として首を縦に振りませんでした。そういうことで一緒になって、もうちょっとたてば50年になりますかね。まだ先2、3年ありますけれども、そういうことできています。

(野 田)

山崎さんは入所してから、ずっと自治会、その他の仕事で大工仕事をやられるんですね。

【山崎さん】

自治会の仕事ね。

(野 田)

いや、所内で、大工仕事を覚えられてね。それで結婚してからも頑張っ、外に大工の仕事に行かれるんですね。それでお金を得て、所帯道具をそろえていくわけですね。

当時はもうせっせと外へ行って頑張ったわけですね。

【山崎さん】

それも、まるっきり行っちゃうとうまくないから、午前中は木工部の仕事をし、11時に上がってきて食事をして、今はもうオートバイとか車があるから楽だけど、あの当時自転車で、中古のそれこそガタガタ音がするような自転車で駆けずり回って。

(野 田)

道具箱に入れて。

【山崎さん】

道具袋しょって、仕事に行きました。

いいところでは、建設作業員で行って1日働いても1,000円ぐらいしかくれなかったのに、私たちが行ったところは1,500円くれたんですよ。そういうことで、時の三種の神器と言われたテレビ、冷蔵庫、扇風機、こういうものを買う金が一切ないから、そういう金で働いてたまった金で、今度はこれを買う、今度はあれを買うということで買ったんですが、テレビを買ってもだめだよと言われました。

電気事情がよくないから、そこだけうんと電気くっちゃうと、みんな停電しちゃうんですね。だからそういうこともあったんで。

(野 田)

だめだよというのは、つけたらいけないと言うんですか。

**【山崎さん】**

ええ、園のほうがだめだって言うんですよ。

だからそういうことでだめで、こういう場合にはいいんじゃないかというんで、つけたりして見てたんですけど、こんなことをしていてもだめじゃないかということで、自治会へ申し入れをして、電気の増量をしてほしいということで、それから2カ月ぐらいたってから、ようやく電気が増量されて、テレビでも何でも見られるようになりました。

**(野 田)**

楽泉園はそんなことなかったんじゃないですか。

**【丸山さん】**

そういうことはなかったですね。

**(野 田)**

ね。施設によって、ほんとに雰囲気は違いますからね。

2人の生活での苦労はあったでしょう。結婚した当時、2人での生活は保障されていませんし、夫婦の部屋もありませんし、そこら辺はどうですか。

結婚したにもかかわらず、2人でのお部屋も当時はなかったでしょ、なかなか。

**【山崎さん】**

なかなか、みんなプロミンのおかげで病気が落ち着いてきてから、結婚する人がうんと出たんですね。中には集団結婚なんて、お金がないから集団で、ほんのお茶菓子だけで結婚式をあげるといような方法も取ったりしていたんですが、夫婦の部屋が無いんですね。だから12畳半の部屋を、私は木工部にいたのでその部屋を壊して4畳半に改造したんですよ。

12畳半の部屋を4畳半に改造するというのは、おかしい部屋になるんですが、そういうほどで何畳かをそういうふうにして、何部屋か造ったんですね。それでも間に合わなくて、何とかそういう寮舎を建ててほしいという一大運動を起こして、「予算が来なければできないよ」という、「来なけりゃじゃなくて、取ってきていただけませんか」ということで園にお願いして、それで野田先生も見て、今は4部屋ですけども、昔は6部屋あったんですね、4畳半の部屋が。ああいう部屋を徐々に造ってもらって、みんなそこへ入れるようになったんです。

当時はなかなか今みたいに、予算をくれると言ってもほんのちょっとしかくれないから、造るのが大変で、その改造の部屋だったんですね、最初のうちは。



(野 田)

お話を聞くと、私たちはみんなで考えなければいけない。忘れてはいけないことですからね。施設の貧困さは、目の前の生活です。だからそれを何とか変えたいという思いがあるわけです。

だけど、国とか行政は、それをどれくらい意図したかどうかわかりませんが利用して、収容体制の法律があるから、この法律で隔離しているから、お金を少しでもよこせということで、厚生省は大蔵省と交渉するということが行われるわけです。

つまりそこでは本質的な問題はそらされたまま収容体制が維持されて、この半世紀を経ってしまったということです。それは何も、今こうやってハンセン病のことを考えることは、今同時に同じことが行われているんです。いろいろなところで。

少しでも、目の前が少しでもよくなればいいんじゃないかといって、本質的に収容され人権が奪われていること、知的障害者の施設についても、精神病者の施設についても同じことがそのまま行われています。決して昔の話ではないですよ、そういう形です。

山崎さん、こういう状態でずっとおうちには帰っていないんですよ。

**【山崎さん】**

38年の年まで帰らなかったです。22年に再入をしてから、帰っていませんでした。

(野 田)

やっぱり帰るのに抵抗があったのですか。

**【山崎さん】**

いや、そうじゃなくて出してくれないんです。

(野 田)

出してくれないのですか。

**【山崎さん】**

許可しないんですね。

(野 田)

たまには、何か、外には働きに行っているのに。

**【山崎さん】**

それはもぐりでやっていますから、自分勝手に行っているから、いちいち断って行かないからね。黙って。だから見つかると、おまえなんだっていうふうに言われるんですが、黙って行ったんです。

家へ帰ろうと思っても、その当時働いていたから何とか金はできたんですが、行こうと思っても親のほうで「おいで」って言わないんですね。それで38年の年になって、「行ってもいいか」と手紙を出したら「いい」ということになって行ったんです。

そしたら病気もよくなってきているから、今度はうちへ来てもいいよというふうになったんで、初めて38年の年に行って、「来るんだったらいつでも来てもいいよ」というふうには、「ただし、外へ出るとおまえの顔じゃわかるから、外へは出るな」と。だから行っても3日ぐらいいは部屋の中にも、もう退屈でしょうがないから、あまりいられないから、園へ帰ったほうがよくなっちゃうから、帰ったりしたんです。

親はものすごく周りを心配するんです。それで私がうちを出入りしようとする、うちの部落は谷になっていて、こっち側とこっち側に部落があるんですが、上の部落から見ていると「あそこのうち、変な人が出入りしている」というと、どこからか話を聞いてうちの前をわざわざ通って見るんですね。「変な人が来ている」というと、「あれは息子じゃないか」と。

親は、こういう大きな声でしゃべるとおやじの声にそっくりだから、「おまえは外へ出てしゃべるな」と言われたんですよ。息子が来ていると分かると、「あのうちはまだ息子が病気であれしてて、出たり入ったりしているから、あのうちへは行かないほうがいい」というふうなことになるから、村八分にされるのが怖いからね。「おまえは外へ出るな」というふうには言われたんです。

(野 田)

まあ、それでもだんだん慣れてくるんですね。

【山崎さん】

ええ、慣れてきてそのうちに、親のほうで「もうここにもいられないから、養老院でも行こうかな」と考えているときだったから、「おまえも外へ出て歩いてもいいよ」と。それでおふくろと一緒に、15分くらい歩いていかないと店がないから、そういうところへおふくろを連れて買い物にも行ったりしていたんです。

それから行くようにしていたんですが、もぐりで行って稼いでいるうちはうちへ帰るお金があったんですけど、だんだん金がなくなっちゃうと、自動車賃もなくなっちゃうから行けなくなっちゃう。ためといて行くというような形でしていたんですね。

(野 田)

お父さんもお母さんもお年でしたから、ある程度世話もされたしやむを得なかったかもしれないけど、お二人とも死に目に会うことはできなかったんですね。

【山崎さん】

ええ、できなかつたんです。

親の兄弟がいたんですが、その人たちが面倒を見るということになっていたようですが、具合が悪くなっても下手に来て、あれがこうであれがこうと言われると、「あのうちの息子は、まだ元気にいるんだ」と言われるのが、多分嫌だと思ったんでしょうね。

具合悪くなっても全然連絡はしない、死んでも連絡しない、葬式があっても連絡をしない。それで後になってから、養老院へ「こういう人がいるはずですが、元気ですか」と聞いたら「1年前に亡くなりました」と、そういうことが電話をして初めてわかったんです。

(野 田)

ほんとに駆け足でお話を伺いましたが、山崎さんがおられる多磨全生園というのは、私はそんな全部を歩いているわけではなくて、わずか5つか6つぐらいしか行っていませんが、長島愛生園の島の隔離に比べたら、もうちょっとましかもしれません。

やっぱり東京でハンセン氏病の隔離の中核施設だったということで、今は大変丁寧な看護を行われていますけれども、雰囲気はかなり隔離的ですね。それに比べて丸山さんがおられる栗生の楽泉園で私が受けた印象は、もっと歴史が違って草津の温泉に湯治していたところの上の山の手で造られた施設です。

行って感心しますけれど、やっぱり当時のあそこを運営された人たちの姿勢でしょうけど、もちろん患者さんたちの強い団結もあったでしょうけど、造っていたおうちを移築されているんですね。施設の中に。下の温泉場に造った、湯治場から。そういった意味では、生活がある程度、それぞれの入所者の自由意思がある程度尊重されるというような雰囲気があったところで、丸山さんは過ごされてきました。

次に丸山さんのお話を。山崎さんも、こういう話をということで、みんながみんなこんなふうには気さくに来ていただけるわけではありませんから、お二人の陰には、もう放っておいてほしいというつらさを込めて、施設で横になっておられる方もいますし、そういうことを想像しながら聞いてください。

では丸山さん、同じようにいきさつをお願いします。

**【丸山さん】**

それでは、今度は私がハンセンになったときから、今日までの道のりを徐々にお話しさせていただきます、ご理解をいただきたいと思っております。

(野 田)

昭和2年生まれですから、お幾つですか。

**【丸山さん】**

78歳でございます。

私は、今も山崎さんのお話を聞いていまして、山崎さんほどの苦労はなかったような気がするんです。それで比較的のんきな話をするようになってしまいますけれど、実際に自

分で通った道については、うそ隠しなく申し上げて、皆さま方にお聞きいただきたいと思っております。

私は、昭和16年太平洋戦争が始まった年の8月26日の朝、仕事に出掛けようと思いましたが、もう既にこの右手が使えなくなっておりました。ほんとに言えば、急になったといっても過言ではないと思っております。

それから24年まで8年間は、自分がハンセンであるということは一切自分ではわかりませんでしたし、ハンセンであるとは思いませんでした。その間には社会におりまして、新聞配達をさせていただいたり、多くの方々と接してまいりました。ハンセンというとか何かもう新しくなってしまうかもしれませんが、その接した方々が、私が癩病であると知らずに私に接して下さったんだなと思っております。

その8年間社会の方々に接していただいたことが、今日の私につながっているひとつの大事なことではなかったかなと、こう思っております。私も実を申し上げますと、お母さんの妹、私のおばさんですが、そのおばさんがハンセン病でありました。ですからお父さんとかお母さんは、私がある程度ハンセン病であるということは知っていたのではないかと思いますけれども、お父さんもお母さんも口にされませんでしたし、社会でも私が見た目はハンセンほどひどいものではありませんので、そういう目で見てもくれなかったし、そういう陰口も私はなかったように思っております。

(野 田)

丸山さんは、今から順々にお話しされますが、子どものときは非常に律義に生活をして、家のために尽くす人ですね。おうちは貧しい中で、ひた向きに家のことを思って支えようとされていたわけです。

ちょうど病気になったときも、新聞配達をしながら家庭を支えていたわけです。だから自分の病気のこと以上に、家がわずかな収入で、僕の収入でやっているのにとこの思いが、非常に強くありましたよね。

【丸山さん】

はい、ございました。

(野 田)

どうぞ。

【丸山さん】

はい。

ちょうど新聞配達の話が出てまいりましたので、その新聞配達をやっております8年間について申し上げますと、私は昭和16年に戦争が始まりまして、年齢的にいっても軍隊と

いうものがございまして、それに志願兵ということがございまして、同級生などがどんどん進んで志願兵になってしまいます。

しかし右手の悪い私には、そういった希望はございませんでした。ですからその当時ですから、男が戦争があっても兵隊にも行けないのか、それだったら生きていてもしようがないだろうということで、私は3回ほど自殺を図ったことがございます。

しかし3回ほど自殺を図った中で、その都度、その都度お母さんが来て、「タカオ、さあうちへ帰ろう」と言われて、私をうちへ連れて帰ってきてくれたことが、私を今日につなげてくれたんだなと思っています。それがほんとに母の愛だったのかなと、そう思っております。

ですから、お父さんもお母さんも、恐らく私がハンセンでありながら家計のために、一生懸命、自殺をさておいて働いてくれているんだなと、十分に分かってくれていたと思っております。新聞配達につきましては、昭和18年に私の区域を新聞配達をしておりましたツチャというおじさんが、ちょうど徴用がきまして、軍事工場に行かなければならなくなってしまいました。

しかし軍事工場に行くについても、新聞配達の代わりがなければ軍事工場へ行けないので、Tさんも苦慮された結果、私のうちへまいりまして、私には直接言いませんで、お母さんに向かって「私は徴用が来たんだけど、代わりがなく軍事工場へ行けないんだ。だからお宅の息子さん、右手が悪いようだけど、新聞配達だったらできるだろう。だから息子さんの意向を聞いてみてくれないか」ということで、お母さんから「タカオ、Tさんがこうおっしゃってくださるんだから、おまえどうするんだ。お母さんは無理には勧めないけれども、あとはおまえが返事をしておくれ」と言われました。

その新聞配達をする線という、その境ですね。だから人、生への境。そのときの、体の中の血が急に躍りだしたような感じがしました。そのときだけは、ほんとに生きるということは、こういうことなんだなということを感じたのを、今もよく覚えております。

それから新聞配達をさせていただきまして、昭和24年の11月10日まで、はっきり申しますと11月9日ということになります。その日まで新聞配達を続け、ハンセンということを知らずに勤めてまいりました。

もう55年にもなる、ハンセン病の長い年月でございましたけれども、私はその中から8年間だけ差し引いた間の、8年間を差し引いてもらって、後の残りが私の本当のハンセンだったなと、今私はそう思っているんです。

それから11月の10日に、どうしても楽泉園に行くようにという、強いお達しがございまして、お父さんもお母さんも、もうこれではどうしようもないなということで、「タカオ、草津へ行って治して帰ってきておくれ。待っているからな」と。ところがお父さんもお母さんも内心では、もうタカオは療養所に行ったら二度と再び帰って来られないだろうと、そんなふうに思っていたのではないかなと、そう思っております。

(野 田)

この辺、ちょっと詳しくお話ししてくださいよ。

【丸山さん】

はい。

(野 田)

入所もかなり強烈な圧力がかかりましたから。

【丸山さん】

ええ。

当時は、強制収容というのがございましたけれども、今考えてみましても、長野県の強制収容を行うについての行いは、大変厳しいものでございました。ですから役場から告げる、療養所へ行くという勧めは、それを断ったとしたら、おまえの病気は世間に広めてやる、それからもちろん仕事をさせてやらない、それでよかったらうちにいてもいいと、だめを押されてしまったわけです。

そうなりますと、もうにっちもさっちもいなくなってしまうまして、お父さんもお母さんもあきらめざるを得なくなりました。その前に私は、うちが大変貧しかったので、田舎でいうへそ風呂という風呂がございましたけれども、そのへそ風呂ひとつない貧しい生活でございまして、風呂に入るにも隣近所のもらい風呂ということをしておりました。

ところが村からそういったお達しがありましてから、その近辺でもお父さんやお母さんは来てくれてもいいけれど、タカオさんはもううちの風呂には入らないようにしてくれと、そういう言葉がございましたので、私はやむを得ず飯田の銭湯にまいりまして、銭湯だったらまだ分からないだろうということで行ったんですが、初めは「いらっしゃいませ」と言って、大変親切に迎えてくれたんですが、徐々に私を避けるようになってまいりました。

最後には、「もうおまえさんは、うちの銭湯には入ってくれなくてもいいから」と、そう言われてしまいました。そのときはもう真っ暗です。風呂へ入るということについては、もう真っ暗な状態でございました。

そんな中でお父さんが、どうして苦労したか分かりませんが、近所のうちで風呂を入れ替えるということがありまして、その風呂をどのくらいのお金がかかったか分かりませんが、それを買ってきてくれまして、私のためにお湯を沸かしてくれまして、たってくれました。

そのお湯に「タカオ、今日からのんびり風呂に入ってくれよな」と言って、お父さんも苦しい胸の内をそっと抑えながら、私に風呂へ入ることを勧めてくださったことを、ほんとうによく覚えております。

ほんとうに苦しい、厳しい中をそうして通ってまいりました。それから11月11日に楽泉

園に入ったわけでありますけれども、その道中長野の駅でお召し列車、私たちは収容列車のことをお召し列車と言っていたのですが、そのお召し列車を引き込み線に入れられて、その引き込み線から駅のホームに出されました。

駅のホームにまいりましたら、ホームに白墨で2本線が引いてあります。そしてその2本の線からはみ出してはいけないと。その2本の線の中を歩いてくれというので、私どもがあおのときに収容された人たちが、一緒に8名まいりましたけれども、その8名がその白墨で書かれた線の中を、ホームを通過して、それから普通の改札口からは出られませんので、手荷物を出し入れする出口から出されまして、そこから駅前に止めてありました、米軍の払い下げのジープだと思いますが、ほろのかかっておりましたジープに乗せられて、長野の日赤にまいりました。

長野の日赤にまいりましたら、当時は現在みたいに靴を履いたまま室内に入るということはできませんでしたので、いちいち玄関でスリッパに履き替えていくのが常識でしたが、そのときは日赤で私たちだけ、「皆さんは特別今日は、靴を履いたままで上がってもらいます。だからスリッパは履かないでください」と、そういうふうに言われました。

それから靴のまま上げてもらいまして、案内された部屋が隔離病棟でございました。隔離病棟にまいりますと、係の人でしょうか、先生でしょうか分かりませんが、ここに入ったならトイレはできるだけ使わないようにしてくれと。それから朝が来ても、水道の蛇口は決して触ってはいけない、触らないようにしてほしいと、そういうふうな厳しい注意もございました。

それで窓を見ましたら、窓は金網が張り巡らしてあって、逃げるにも逃げられないような状態でございました。その中で一晩休むわけでありますけれども、休むにつきましても、敷いて寝るものもございませんでしたから、軽井沢の駅まで送った、自分の持ってまいりました寝具類を、また送り返してもらって、日赤の案内された部屋の中から、各自が持っていた布団を解いて、そこで一夜を明かしたことを覚えております。

次の朝、日赤を出る時に、今度はどこから出たかと思えますと、亡くなった人が出される、ひつぎが出てくる出口ですね。そこから私たち8人が外に案内されまして、そこからまた昨晚のジープに乗せられて、長野の駅へまいりました。

## (野 田)

お聞きして分るように、私は思うけど丸山さんの話を聞いていて思いませんか。地域の人の、住民の、国民の偏見、偏見というけれど、実は行政、国が偏見のおぜん立てをやっているわけですね。

何の意味もない白墨を引かれたり、あるいは入所した後すぐ消毒するとか、そういうことをすれば周りの人たちは恐ろしいものだと思うのは当たり前であります。日本の社会というのは、そういう行政がずっと先行してやってきたわけで、今でも私は国民に偏見があるという論評が多いのですが、もうちょっとそれを深く考えてみる必要がありますね。

一人ひとりに人には、身近にいる人の顔が分かってつながっていても、それを強い排除として組織するというのは、やっぱり権威者であり、行政であるということ。例えば近い偏見というか、病気と違う偏見では、学校でマスコミが相変わらず書きますが、関東大震災は日本の民衆の差別意識で、朝鮮人、中国人を殺したなんていうのは、枕詞（まくらことば）のように書いてありますけど、あれは警察と軍隊がまず率先して殺したんですから、それに朝鮮人に気をつけろとって張り紙を出されて、それを信じない国民がどれくらいいるでしょうか。

だから私たちは、そういう役場が何かをするということに対して、よほどもう1回検証していかないといけませんね。あまりそんな話を聞いても、順次に地元よりも外へ一歩ずつ出ていくと、排除とか偏見が強くなっているのが、その収容のプロセスが物語っていますよね。

私は、収容にあたった方が80過ぎで、まだご健在で、お会いしに行きました。そのときの話をつくと、保健所のほうに丸山さんは新聞配達をしていると、だから危ないという通知があったということになっております。真偽は分かりませんが。

だけど一方では、丸山さんが収容されたときには新聞に、これで長野県が無癩県になったと。全国に先駆けて初めてなったという記事が載っています。だから行政は、ある程度功を焦ったのかもしれませんが。まだチェックされている、当時8人が収容されたんですか。

#### 【丸山さん】

8人です。

#### （野 田）

だからその人たちを一気に収容して、全県に先駆けて、県一ですね。大体何でも、何とか県、日本で最初にやったとか、ああいうばかな話は常に好きなんですけど、その無癩県運動もそういう形で行われて、そのときの収容の中で行われています。

聞くと、その口実を、保健係の方は「自分は躊躇があった。しかし、GHQの命令だから逆らえないというような言い方をされた」と言っておられますね。これはほんとにそうだったのかどうかは、真偽の確かめはありませんけれど、常にそうやって上に上に、権威付けして実行していくということが行われたようです。

それでちゅうちょがあって、渡々伝えに行くと。収容所に入ってもらわないといけないと。そうしたらお父さんが村長に会いに行かれて、入所になったら回りの人たちが偏見を強く持って、この村に私たち一家は住めなくなる、それをどうしてくれるんだということで、お父さんが。

お父さんは、そんなに強い人ではないですよ。ぼそぼそと言われたということです。それで村長としても困ったもので、GHQの命令だと言われたというので、あと何とかうちの面倒をみないといけないということでいたと。一応そういうお話でした。



だから何をしたかといえば、入所した後、Yさんという係の人は、何度かうちに訪ねて行って、それから丸山さんの妹さんが結婚した後は、お婿さんを村の役場に勤めてもらうとか、そういう形で支えたんだということを言っておられました。

だから身近に生きている人間は、それなりに情もあって支えようとしていた。だけどそれを強い排除として組織する力というのは、やっぱりこの社会に強く働くんですね。その問題を私たちはよほど考えていないです。

そういうことを組織していくのが、多磨の全生園の園長であったり、そういう人たち、学者であったり、政治家であったりしていていますよね。

どうぞ、続けてください。

### 【丸山さん】

それでは、長野の日赤を出ましてから、信越線で上田、それから小諸、軽井沢という順序で列車は進むわけでありますけれども、やがて軽井沢に着いたわけでありますが、8人の病人が数珠つなぎになって道を横切ったり、ホームへ行くとすると、観光客の方々が珍しがって見るわけでありますけれども、私たちはそれを恐れている余裕はございませんでした。

そして軽井沢駅の草津行きのホームにまいりました。11月のその頃ですから、寒風が吹きすさんでおりましてけれども、その寒いホームで私たちが乗せられる臨時列車が出るまで、そこで待たされるわけです。

それで、やがてその列車に乗せてもらって、草津に着くわけでありますが、草津の駅に着きましたら、草津の駅にはもう既に楽泉園の職員の方々が白衣を着て、噴霧器に消毒液をいっぱい詰めたものだと思いますが、もう列車が止まったら、途端に車内に入って、びしょびしょになるほど消毒をされるわけです。

私たちはそんな中を外に降ろされて楽泉園に向かうわけでありますが、楽泉園に向かうといっても、今のような高級なバスがあるわけではありません。ですから、楽泉園が入園者の食料などを確保して運ぶトラックに全員が乗っけられて、そして、まだ舗装もしていない悪路を私たちは楽泉園に収容をされていったわけであります。

私は先ほど、自分が本当にハンセンであるかないかということは、まだまだそのときは半信半疑だったんですが、楽泉園の正門をくぐるときに、門柱にあります名前を見ましたら、国立癩療養所という文字が浮かんでまいりました。それで、その「癩」という字を見たときに、「ああ、おれはやっぱり癩だったのか」、そういうふうに私は癩というものをそのとき初めて自分のものとして認識しました。

収容されるにしても、すぐには収容できません。一人ひとりが検査をされてからでないといけませんので、寒い中で、外で待っておったわけでありますが、そのときに今の福祉課ですけども、当時は分館長と言いました。その方が出てきて、一人ひとりを見て回るわけでありますが、最後に私のところへ来て、「ちょっと右手を出してみろ」と、こういう

ように言われますので、私は言われるままに右手を出してみました。そしたら、「ああ、こりゃだめだ」と、こういうふうに一言言われたんです。私はそのときに、それまで何とかしてもう一度うちへ帰ろうと思った気持ちが、逆に今度は、おれはもう帰れないんだ、もうおれはだめなんだ、そういうふうにするようになって、その日から、もううちへ帰るということはあきらめて療養所の中で生活をさせてもらおうということになっていったわけでありませう。

所内の生活につきましては、全生園と私どものところとは相当な差があったと思いますけれども、これはほとんど山崎さんがおっしゃったような生活の経過をたどってきたのではないかなと、こういうように思います。

私は、ここでなぜ私がこういう場に出て、こういうお話をさせてもらおうかなと思うようになりましたのは、先ほども野田先生がおっしゃられておりましたけれども、24年の11月19日の読売新聞に、私どもの8人が収容される時の記事が出ておりました、その記事の見出しに、「癩患者一掃」という見出しで出ておりました。私はその「一掃」という文字を見たときに、これはもう黙ってはおれないところへ来ちゃった。だから、自分がこうやって生かされている間に、少しでもハンセンのことを話して、皆さま方にわかっていたかなければいけないんじゃないかなと思うようになりまして、今日こうしてこういうところに出て、お話をさせていただいておるわけでありませう。

私は、その後、療養所の中の生活をさせてもらっておりましたけれども、その頃の療養所の中というのはひどくて、グループみたいなのがございまして、偉い人のところにつかないとなかなかいい待遇がもらえない、そういうような時代でありましたので、結婚をするにつきましても、なかなか偉い人たちの許可を得ないと結婚ができなかったわけでありませうが、私は。

(野 田)

ある意味では、外ほど管理がえげつなくなかった代わりに、内部でボスがいたんですね。

【丸山さん】

そうです、そうです。

(野 田)

そういうひとつの村制を維持していたわけですね、楽泉園の方は。

【丸山さん】

それで、私は、同じ伊那のほうから楽泉園に、私よりかも半年早く入園いたしました、まだまだ中学生の3年でございました、その子がおりましたけれども、その子があるボスの方の養女にもらわれていくという話を聞いたわけですね。これは、あんなところに養女に

行ってしまったら苦勞するだけじゃないかなと私は判断しましたので、ボスなんかをさておいて、自分でその娘さんの実家に行きました。実家に行きまして、しかじかといろいろと説明をさせていただいて、許しを得るわけでありませけれども、その許しを得るにいたしましても、二つ返事というわけにはまいりませんでした。

ですから、そこには両親と兄弟、それから両親の親、隣近所の方々も集まってくれまして、私を検査するわけですね。これはお嫁にやってもいいかな、どうかなというあれをするわけです。それで、いろいろとお話を申し上げておりましたら、いずれにしても娘も帰ってこれないんだろうし、あんたも帰ってこれないんだらいいだろうと、そういう結果を得まして、私は改めてその子と結婚をさせてもらうという運びにしたわけです。

ところが、楽泉園に帰りまして、それをボスの方に告げますと、おまえのやっていることはかりそめの恋じゃないかと、そう言って、いつもいつもそういった言葉が飛んできて、私を邪魔にするわけです。でも、私はもう親から許しを得たんだから、これには負けてはおれないということで、結婚を2年後にさせてもらうという約束をして、私は26年の春に、その子をお嫁さんとしてちょうだいたしたわけでありませ。

当時、療養所の中の結婚と申しますと甚だお粗末なものでございまして、私どもの結婚式のときには、これは園の規定ですから、これを破るわけにはまいりませないので、そのとりにさせてもらったわけでありませますが、お祝いとして紅白のまんじゅうがあるだけです。それに、炊事から出たたくあんがついて、それが結婚式のお祝いでした。

それを私どもは結婚のお祝いとして、皆さん、来ていただいた方々に受け取っていただきながら結婚をしたわけでありませますが、なかなか私もお金がない中でありませたので、結婚については紅白のまんじゅうがあったので救われたというのが現実でございませ。

#### (野 田)

丸山さんはお話をされるように、大変積極的に生きていられるから、ほかの方と違って、まずおうちに娘さんと結婚しますとちゃんと出掛けていくという積極性はすごいですね。それから、楽泉園というところはある程度ルーズだったから行くことができたということがありますね。お話を聞いていて、これが長島愛生園だったら、とても不可能ですね、出ていくなんて。そういう中で、丸山さんは状況を切り開いていられるわけです。

#### 【丸山さん】

ちょうど私どもが非人間から人間にカムバックできた22年以降、先ほど野田先生もおっしゃっておられました、楽泉園の中には特別病室というのがございまして、そこに入ったら、恐らく出て来られないだろうというような厳しい監獄でございませたね。

私が入った頃は、監獄ももうだいぶ朽ちておりましたから、うろ覚えにしか覚えておりませんけれども、もし、まだ22年が長引いてきたとしたら、私も恐らくそこに入れられた1人ではないかなと、こんなふうにも考えられるわけでありませ。

それからあとは、先ほど山崎さんがおっしゃいましたように、当時、だんだん時代がよくなってまいりまして、周りでも洗濯機を買ったり、それから、お金のある人はテレビを買ったりというふうにだんだん変わってまいりました。私は洗濯機など買うお金も毛頭ございません。もちろんテレビを買うお金などあろうはずがございません。

私はおまけに右手が悪いわけでありますから、両手を使うような仕事はできないというふうに思っておりましたけども、家内が洗濯板、皆さん、ご存じじゃないでしょうか、洗濯板で家内が洗濯しているのを見ましたら、こりゃ、家内はこんなことをさしていたんでは申し訳ないんじゃないかなというふうに私も感じまして、37年の夏、草津町のA土建というところに私はまいりました。

そして、A土建の社長に、片手でもできる仕事はございませんかと言ってまいりましたら、建設作業員だって、何も両手がなけりゃだめだというんじゃないくて、片手でもできる仕事があるんだから、来たらしいよと、そう言ってくれましたので、もう私は早速次の日から弁当を持って、これはもちろん無断です、園には告げずに自分で弁当を作って、そしてA土建に勤めるようになってまいりました。

それから、オリンピックの年ですね、この年の暮れに私は凍傷に右手がなくなってしまいました、日が照っても痛い、日が陰っても痛いというありさまで、これではもう建設作業員というのはおれにはだめなんだというふうに思って、これで年内で建設作業員を辞めようと思っておりましたところ、運がいいのかどうか分かりませんが、K荘という旅館から社長が来てくれて、うちに来て、ひとつ会計をやってくれというような声がございました。私は会計などやったことがございませんので自信がございませんでしたけれども、何せお金が欲しいわけですから、じゃ、できるかどうかはわかりませんが、やらせてもらいますと言ってまいりました。

#### (野 田)

ちょっと時間が迫ってきたので、後の話を聞きたいので、ちょっとだけそこではしゃってさせていただきます。

丸山さんは、皆さんが受ける印象どおり、非常に勤勉でひたむきですから、その後、ホテルに就職されて、そして、普通だったら嫌がるでしょうけど、便所掃除を始めまして、その勤勉さを認められた後、フロント係主任になって、ホテルの総務部長にまでなります。ひたむきにずっと働いて。

それから病気は、丸山さんはほとんど症状が出ないので、治療を一度も受けておられないんですね。手はどういうことか、いきさつは知りませんが、凍傷になって悪くなっただけで、ハンセンとしての治療は受けておられません。丸山さんはご自分で、恐らく本心は何でしょうけど、いまだに半信半疑のままですね。病気じゃないという思いと両方の中に揺れ動いておられます。

しかし、今更取り返しがつかないという思いでおられるわけです。時間があまりありま

せんから、あとちょっと、丸山さんはこういうひたむきに働きながら生きてこられて、そして、つらい思いをずっと支えられたのは、丸山さんにとっては宗教があります。その話はちょっと時間がないので、ちょっと詳しいめにお話ししていただけたらと思います。

**【丸山さん】**

私は昭和28年の3月に、あまりに私は気が短かったので、この気短さを何とかしなきゃならないということから、天理教の信者にならせてもらいました。信者にならせてもらいまして時は過ぎていきまして、48年に、私は団体を組んで、奈良県の天理教ですね、ここにひとつ1人でも多くの人に行ってもらおうと。それはなぜ行ってもらおうかといったら、天理教というところは、天理教に行きますと、一斉に迎えてくれる方々が「おかえりなさい」と言って迎えてくれます。ですから、うちへ帰れない人たちが、うちに帰れずに、親兄弟から「おかえり」「おかえりなさい」と言って迎えてもらえる人たちは少ないわけがありますので、天理教へ行って、天理教の人たちからそういった声を聞いてもらったら。

**(野 田)**

奈良県の天理市のことですね。

**【丸山さん】**

家へ行ったような気持ちになってもらえるんじゃないかなと思うことから、48年から私は始めさせてもらって、平成6年までおぢばがえりということをしてまいりました。だから相当、今の在園者の方々の3倍ぐらいの数が天理に行ってくれておると思います。これは延べの数ですけれども、それだけの数を天理教に連れていっておるわけですが、その方々がともどもに、本当にうちへ帰ったようだなど、そんなふうに思ってくれておったのではないかなと、そう思っております。

**(野 田)**

皆さん、どこかのハンセンの療養所に行かれたら分かりますけど、各施設には宗教の施設が置いてあります。キリスト教、それから各日本の仏教団体ですね。楽泉園は天理教の教会も。

**【丸山さん】**

ございます。

**(野 田)**

ありますか。その中心をずっとされながら、拠り所にしてこられたわけです。しかし、丸山さんは、ずっとおうちにも帰っていませんよね。

**【丸山さん】**

国ですか。

(野 田)

ええ。

**【丸山さん】**

おととしの夏、行っておりました。

(野 田)

ずっと、五十何年も帰っていないですね。

**【丸山さん】**

うちは帰っております。旅館にいるところはセールス。

(野 田)

帰っているんですか。

**【丸山さん】**

先生、ちょっと一言。

(野 田)

どうぞ。まだ時間はありますから。討論の時間がなくなって、それが気になる。

**【丸山さん】**

ちょっとどうしてもここで私は申し上げておきたいんですけども、先ほどから強制収容というようなひどいことを私はお話ししてまいりましたけれども、その強制収容という陰で、私はこういう方に出会ったことがございます。

県庁の中のユマニテ・人間尊重課で調査をしていただいておりますけれども、私が新聞配達をしている当時、Aという先生がいたわけです。これは恐らく高等学校の先生でなかったかと思うんですが、その先生が、私が楽泉園に来てから、私のうちにお見えになって、私のお母さんに、なぜ私に黙って息子さんを草津へやったんだと、何で一言言ってくれなかったんだと言って涙をこぼしておられたということを聞いております。そうした世間の厳しい中でも、そういった先生がいてくれたんだなということをお母さんが大変喜んで私に聞かせてくれたことがございます。

そのほか、私が強制収容について新聞社の方に退職届を出しに行ったら、新聞社の社長

が、役場に掛け合いに行ってくれたわけです。どうしても丸を草津へやらんでくれ、やられたらうちが困るんだというようなことを言って陳情に行ってくださいったわけでありませうけれども、これも村ではどうにもならないんだと、上からの命令だから分かってくれということで、向こうでもそう言われるから、ひとつ辛抱して、草津へ行ってくれと、そういうふうに言われました。

だから、そういった方々がいらしたということが、私には大変ありがたかったと思うし、皆さんにもそういう方々がいたということをお伝えしておきたいと、こう思って、今、一言触れさせていただきました。

ありがとうございました。

(野 田)

じゃ、あと、皆さんのほうからちょっと討論を下さったらと思います。時間があと15分ですけども、どうぞ。ちょっとだけ自己紹介してお話してください。

**【県民－Aさん】**

Aといいます。お願いいたします。

丸山さん、誰の診断でハンセン病というように決められちゃったわけですか。

**【丸山さん】**

私は、その当時右手にやけどをしまして、飯田のTという病院にしばらく通ったんですが、やけどがなかなか治りが悪いと、そういうことで、Tという病院から紹介してもらって、U医院というところに行っただけです。U医院は皮膚科でしたから、そこへ行ったら、玄関を開けるなり、もうあんたは入らなくてもいい、分かったから入らんでくれと、そう言われまして、もう全然見ずに、私はそこから追い返されたわけです。既にもうその時にハンセンというものが皆さんから嫌われているということは重々承知していただけていると思います。いいですか。

**【県民－Aさん】**

はい。分かりました。

(野 田)

私も聞いていると、赤紙の話と似たような感じがするんですね。

同じ村でもう1人のハンセン病の人は、村の有力者で、そのときの入所は、診断書が違う形で、結核性の狼瘡(ろうそう)だとか何とかいう形で収容されなかったという話を、おじいさんのYさんが言っておりました。貧しい人とか、抵抗しない人を先に入れていったということなんでしょう。それは日本の行政の弱みだったと思います。

**【丸山さん】**

ハンセン病というものはこんなにみじめなものかなあと、つくづく後で思ったのですが、21年に私はお爺さんが亡くなったのです。そのお爺さんが亡くなった死亡診断書を村の医者のところをお願いに行ったら、即座に断わられてしまった。うちでは書けない。

そうということで私は岐阜県の方から飯田に越してこられたKという病院の先生をお願いして死亡診断書を作ったことがございます。ですから、その村のその医者が私どもをどれほど警戒していたのかなあということがしみじみと分かるような気がするのです。

(野 田)

何で書けないのですか。

**【丸山さん】**

全然相手にしてくれないのです。いけない、そこにいけない、上がってはいけないというわけです。

(野 田)

検死の確認に行きたくないから。

**【丸山さん】**

それを言うと私も他のことも言わなくてはならなくなるので、その医者がそう言ったから、私はそこを出て、Kという医者のところへ行ったわけですけども。

(野 田)

どうぞ。他の方。若い方どうですか、お兄ちゃんどう。何か聞きたいことない？

**【県民－Bさん】**

Bといいます。山崎さんにお聞きしたいのですけれども、先ほどあの治療薬の話が出ましたが、特に特殊な薬、昔、今でもそうなんですけれども、薬は大変高いものですよ。

しかも、昔はそんなに裕福な人は大勢いるわけではなくて、みんな農村貧しい中で、そういう薬の治療代が大変だったと思うので、その辺りと、それからさっき良く判らなかったのは、どのくらいの回数でやっておられたのかということと、それから野田先生に聞きたいのは、その当時その薬の効用については、今どの程度の価値があったという局報か何かで出ているのか、情報時点ですね。買ってでも飲む薬なのかどうか。そこらの辺をあわせて教えていただきたいと思います。



### 【山崎さん】

大風子油だったらですね。500ccのビンで、あの当時どのくらいしたのか親が買ったので、値段はちょっと分からないが、1本あれば結構もったですね。全生園入ってやる時には注射器5ccをやってくれるのですけれども、1本だけでは物足りないからもっとやれば早く良くなるのではないかという単純な頭で、ずっと15人、20人並んでいる。やって終わったらまた2箇所で行っていましたから、あの当時。だから、こっちに並んだらこんどこっちに並ぶというそういうやり方をしていたのですよね。だから、あの当時今のように寒くなってきますとね。油だから固まってこう白くなるのですよね。あれを温めてやるから、家でやってもよく温めすぎて熱くなることもあるのですよね。火傷したことはないですけど。そういうやり方をしていたですね。だから、あの当時の金だったら大風子油はそうお金は高いものではなかったのではないかなあと思うのですけれども。プロミンは高かったようですよ。でも、我々には買うお金がなかったけども、お金がある人は、先生が買うんだったら買ってあげるなっていうようなこと言って、お金のある人は先生に頼んで買って、やってもらって、病状よくした人は結構いますよ。私はお金がなかったからできずに、先生のやってくれるの待ってて、やってもらったという状況ですけど。

### （野 田）

私は、どれくらい効果があったかっていうのは、専門じゃありませんから分かりません。ただ、体質によってある程度効果はあったって言うけど、基本的に殺菌効果はありませんから、病気の進行を止めたっていうわけではありません。ちょっと改善は人によってかなりあったんですけど、全体としての病気の進行はとめられなかったということですね。ただ、ハンセン病は私はすごく誤解しているけど、病気の、ハンセンの菌そのものじゃなくて、その菌で、色々な起こる身体的な障害があるわけですよ。神経が麻痺して、そのためにケガをすとか、骨折すとか、化膿すとか、そういう医療がいっぱいあるわけですが、そのことは逆に言うと生活環境はよくて、清潔な環境にあって、お風呂もちゃんと入れて、下着もきれいで、ご飯もちゃんと食べれたらそんなに悪化しないという面もあるわけですね。だから、病気の狭義の医学的問題と、おかれた環境っていうのは全部同一疾患でも異なる関係にありますけれども、これはハンセン病のすごくそうなんです。だから劣悪な環境に置かれていけばその人の生育は悪くなって、寿命も短いし、また、お二人も死を考えたと、やっぱり日本の文化は、すぐそういうことは、結局みんなが病気を支えようというより、不幸は個人になってしまう社会ですから、そういう社会の中で死を考えるという問題はすぐ出てくるということでしょう。今も続いていますよね。どうぞ。

### 【県民－Cさん】

いいですか。あの・・・

(野 田)

ちょっと自己紹介してから

【県民－Cさん】

丸子から来ましたCといいます。あのプロミンという薬は飲まれたかどうか。

【丸山さん】

プロミン？それは申し訳ないんだけど、入所してからハンセンの治療全然してないんですよ。ただ私がこうやって、じゃあ何を飲んだかって言われると、はじめに申し上げましたように、これは駄目だった言われた瞬間から、私はもう治療なんかしないんだと、こんなもんだったらもう治療する必要ないし、ただもし帰ってけと言われても社会はもうそれを認めてくれないんだ、だからプロミンで病気は治っても、偏見差別というのは薬じゃ治らないですよ。だからそれが一番おっかないわけです。だから私はもう治療はしないけど、そういう偏見差別が怖くて、社会にはなかなか出て行くという気持ちにはなれなかったと、そういうことです。

【Cさん】

ありがとうございました。それから野田先生いいですか。なんかさっきの、無癩県ってこのだとか、それから癩患者一掃とかいう言葉を聞いただけで、私怒りを感じるんですが、その当時はそれぞれのそういう地方の自治体、県単位でそういう癩患者をこういうふうに自分たちの近所から排除するっていうことを競争していたっていうか、そんなようなこともあったんですか。

(野 田)

だから、近所から排除することを競争してたって問題じゃなくて、下のレベルってのはどこか身近なところで起こったわけじゃないです。やっぱり中間ぐらいでしょうね。どっから起こったのか、よく長野県のことまだ分かりませんが、県レベルで行われたわけですけど、それを聞いてきたのは、私の見当は療養所長がそういうこと言いましたよね、隔離、隔離って。

それによって同意した役人、それから警察署長とかですとか、そういうのが動くっていうことで、それが県単位で一人としてそういう人を置くなと、そして収容して、ゆくゆくは日本には癩がなくなると、そういうことを主張したんです。その一番の中心人物は光田さんというドクターで、彼が日本の収容体制をずっと強固に主張したわけです。しかも性格が非常に攻撃的な人で、異議を唱えた人に対しては罵倒するということでした。

**【県民－Cさん】**

そういう性格っていうものは日本人まだまだずっといろいろなところで見られるという…

(野 田)

そういう人がトップになりやすい社会ですから。

**【県民－Cさん】**

ありがとうございました。

(野 田)

それからちょっと付け加えときますけど、複雑な問題として今日は一貫して、皆さんに言っておきたいのは、やはり長いこと施設に入所してますと、もう社会に出て行くということが怖くなります。お二人は違うわけですけど。だからやっぱり話をしている中に、そういう国によって壁の中でご飯食べさせてもらったから、もうこれでいいんですっていう方もかなり多く見られます。しかし、そうしたのもまた私たち社会だと考えられるという面がないといけないですね。どうぞ。

**【県民－Dさん】**

私、今塩田公民館でお世話になっているDと申します。私、実は昭和14年生まれで、昭和21年に学校にあがったっていうあれなんですけど、小学校のときに、実は映画で学校を、体育館で、隔離政策のを見て、初めて見て、癩病、今で言うハンセン病ですね、これを初めて知ったんですけど、恐ろしい病気だっていう、映画なんかではそういうことを強調するようなのがあって、題は忘れてしまったんですけど、そういうような経験があります。

それから、小泉首相が謝ったんですかね、謝罪した、あのニュース等でハンセン病っていうのは治るんだなってことを知って、ということ。それからもうひとつは今、塩沢地区で、伊波さん、そちらに今お見えになっていますけど、沖縄でハンセン病にかかれたっていう、そういう方に何回も講演していただいたりして今やっているわけですけど、その中で一番気になるのは、長野県はなかなか郷里へ戻れない、まだ一人も戻っていないわけですよ、そういう状態があることを知らされて、何とかできないかなと思っているわけですけど、以上です。

(野 田)

今、郷里に戻れないという問題は、中間的な地域で、沖縄のようにまだ村落生活が強いところはほんとにあれだし、それから都市もまた一定率のアパートとかその他がありますけど、長野県はちょうど中間的なところがあって。それからやっぱり県民性もありますよね、聞いていると。おとなしくてやっぱりもうここで一生送ったほうがいいって言われる

方多いんですね。それから、今やっぱり聞いてて小泉首相が言ったからハンセン病が治る病気だなんて思ったっていうのは、それは事実だから仕方ないけど、本当に情けないですね。もうちょっと私たちは何が起きているか知ってほしいですね。あなたを非難するわけではないですけど。小泉首相だってだいたい厚生大臣だったときにあれぐらい陳情して何にもしなかった人ですよ。たまたま裁判になって、何の行き違いか控訴やめたから、救世主っぽく思われているけど、とんでもない人です。

#### 【県民－Eさん】

佐久市から来ましたEと言います。私、社会教育指導員ということで、同和関係の啓発の仕事をしておりますが、こういう勉強の機会をいただいております。感想ですがよろしいでしょうか。先程も出てましたが、無癩県ということを知ったときに、長野県は満蒙開拓団で、多く行くということで競って全国で一番送ったことで、その時は正しいと思ってやったことが結果的には間違っていた。今日のハンセン病についての無癩県のことでもそうですが、行政が誤った政治をしてきた。特に甚だしいのはプロミンというよい薬が出たのに使わなかったとか、伝染が弱いと分かっていたのに、30何年間もずーっと引きずって誤った政治をやってきた。行政も一步間違ると、過ちをしますから、気がついたら早くに直す。エイズの問題もそうです。ワクチンの問題もそうです。いつも正しいことをやっているとは限らない。過ちがあったら即座に切り替えて申し訳なかったとやれば、小さくて済むと。最近のことで、台湾と韓国の訴訟の問題、同じ人間で外国人で範疇にないと判決が2つに分かれましたけど、日本人でも外国人でも同じ人間であると立場から、年取った元患者の皆さんを救済するというそういう人権の立場からやってほしいなと思っております。いろいろありますけど、長くなりますのでこの辺で失礼します。

(野 田)

はい、どうぞ。

#### 【県民－Fさん】

山崎さんに質問なんですけど、戦前に召集されて岡谷の工場で健康診断されて、その時にその時の医者に自分が「癩です」とおっしゃったら、先生が椅子を持って壁側で退いてとおっしゃったじゃないですか。その時、山崎さんはどのように感じましたか。その医者の態度から、教えてください。

#### 【山崎さん】

その時はね。その病気といってもお医者さんだからまさか椅子を持って後ろまで下がるとは目の前にいるわけですから、手がどうだ、足がどうだ、と言うなら分かるんですが、この先生はお医者さんなのかと思いました。

**【県民－Fさん】**

その当時、ハンセン病は差別されていたと思うんですが、自分は、ああ病気なんだと思いき知らされた瞬間ではないかと私は思ったんですけど、すごくショックだったとか、腹が立ったとかそういう気持ちはありましたか。

**【山崎さん】**

ものすごく腹が立ちました。でも、その時は自分が病気になっているといっても表面だってひどくなっている症状ではないから、何で壁際まで椅子持って逃げって、手はどうだ、足はどうだ、なんて言うのかなと思った。その後、何でもないので見てこうだからと分かってから消毒ならいいんですが、いきなり外に出して椅子を消毒して持って行って代えたという、なんでそこまでするんだろうと私は帝大に通っているときでもそういうことは全然なかったし、日赤の病院へ行ったときもそういうことはなかったし、全然そういうことをしていないから、そこでそういっただけでそうなるということで、ものすごく不思議に思うのと腹が立ちました。どこも見っこなしにそうやるんですから、それだけです。

**【県民－Fさん】**

私、今、看護学生なんですけど、そういう医者の態度がすごく気になりましたので、話させていただきました。ありがとうございました。

**(野 田)**

あの、病気に対して一番偏見が強いのは医者ですよ。自分の専門の分野はある程度いいでしょうが、他の分野については全くひどいでしょう。私は精神科医だけど、精神病の疾患について一番自分の親族で結婚とか何とか言ったら、すぐ絶対反対と喚き始めるのは医者です。というのは、教育が間違っているからです。今、検証会議でも話しましたが、やっぱり身近な信大とかですね。ちゃんと医学教育は一体どんなに犯罪的なことをやってきたかということを講義してもらわないと困る。戦前から人体実験をやり、ハンセン病もそうですけど、今の精神医療もそうですし、エイズの問題、スモンの問題、ずーっと累々とゆがみをやり続けきた医療が一方にあるんですから、そのことを知ることは何も恥ではありませんから。医学教育でちゃんとしていかないといけない。今でもおそらくハンセン病の偏見はドクター達に一番の強い可能性があると思う。年配のドクター達には、無知が多いのではないのでしょうか。あの時間になりましたので、是非これからもまた討論を続けてください。それから皆さんの地域に帰ってこういう話し合いを持ちたいと思ったら、是非2人だけでなく、行ってやろうと言ってくださっている方もいますので、呼んで討論をしていただきたいと思います。私たちが伝えたいことは、終わったことではなくて、このことで学んだら、似たような問題がどんなにたくさんあるかということを考えてほしいという思いがあります。これで終わらせていただきます。